



土岐市
TEL
FAX
メールアドレス
所
発行責任者
発行
日
字
題

教育研究所
0572-54-1111 (内371)
0572-55-6310
kyouiku@city.toki.lg.jp
No.551
所長 三宅 裕一
令和2年5月29日
山田 恭正 教育長



『夢と希望を持って！』
感染予防をしての入学式』

撮影 土岐津中学校

谷口 順子 先生



教師の「ことば」

土岐市教育研究所長 三宅 裕一

いつもの年のスタートであれば、「満開の桜のもと、小・中学校の入学式に参列し、・・・」の書き出しでこの巻頭言も始めたと思いますが、今年に限ってはそうはいきませんでした。子どもたちと担任の先生は、始業式・入学式で顔を会わせたのみ、落ち着いて学年・学級開きもできていません。一日も早く、子どもたちとの再会を果たし、そして「仲間づくり」「集団づくり」ができる日々に戻ってほしいものです。

さて、私たち教師の仕事には、いろいろな技術が求められます。「ことば」もその一つです。私たちは日頃から時間を見つけて、一人でも多くの子どもたちと話す時間をつくろうとします。そんな思いが実を結んだときは、とても嬉しい気持ちになります。

学校には花壇があり、草花を育てることを通して、子どもたちが多くのことを学んでくれることを期待しています。教育評論家の家本芳郎さんが花壇でのこんな事例を紹介しています。

ある学校で、雨降りの日に傘をさして、花壇に水をやっている子どもがいました。先生は、傘をさしてせっせと水をやる子どもに近づいて、聞いてみました。「雨が降っているのに、どうして水やりをしているの？」すると、その子は、「だって先生、雨の水より水道の水の方がきれいなんだもの。きっと、きれいな花が咲くよ」と答えたそうです。

私たち大人（教師）の考え方や目線で子どもたちと接していく姿勢について、一石を投じる話材です。何気ない子どもたちの行動を見たとき、私たちはそれらを大人の常識や社会の常識、学校の常識、教師としての眼で見て、子どもたちを理解したつもりになってはいけないということです。この事例一つとってみても、子どもたちに対する接し方によって、本物の「感性」が育っていくチャンスがあるということです。私たち教師は、「ことば」を含めた指導を学ぶ必要があるのではないのでしょうか。

わからないことへの不安

～学校教育への信頼と期待～

土岐市教育長 山田 恭正

個人的なことですが、以前から不自然な動悸があり、昨年末の人間ドックで「不整脈」との診断を受けました。県病院を紹介いただき、ものすごい不安を抱えながら、精密検査と診察を受けました。その結果、手術を受けて根治することを勧められました。改めて説明を受けることと予約待ちで手術日が3ヶ月先ということまで決まりました。次の診察日は2ヶ月先、それまでが不安で不安でたまらないこと。「不安」の要因は、「どんな手術なのか」「どのぐらい入院するのか」など、「わからないことへの不安」がずいぶん重圧になりました。

最高潮の「不安」を抱えて2ヶ月後の診察日を迎えました。担当医からの説明は、次のようでした。

①原因、手術の必要性や内容、方法、術後など順序立てた説明

②質問に対する専門言葉を使わない説明

③画像や模型を使った説明

④術後の改善に対する期待感がもてる説明

⑤患者（私自身）の心情を思いやった説明
形式的な承認や了解を求める内容もありましたが、担当医の誠実さが伝わってきて、「この先生なら信頼して任せられる」という思いが、「わからないことへの不安」をかなり取り除いてくれました。

さて、今回の新型コロナウイルスの対応の中で、「臨時休業の度重なる延長」それに伴う「学習の保障」、「児童生徒の心的な不安」等々、「わからないことへの不安」が、私たちに突然、山のように襲いかかってきました。

いよいよ6月1日から学校の再開です。先の

話からしますと、保護者（児童生徒）はまさしく患者の立場です。そして、学校の再開は手術、担当医は先生方一人一人になります。

さて、どんな説明責任を果たしていくことが「わからないことへの不安」を解消することになるのでしょうか。先の担当医の説明に沿って考えてみました。

①学校再開の予定、その後の見通しを時系列で説明すること

②「どんな質問にも答えます！」という体制（方法）や誠意を示すこと

③学校が再開することに大きな期待感をもってもらふこと

④学年や家庭の状況等に応じたきめ細かな説明の内容や方法を講じること

⑤上記の事柄について、平易でだれでもわかる文書を作成し、もれなく渡ること

教育関係者は、なんとなくイメージできて説明しなくてもよいことでも、保護者（児童生徒）は、想像以上の不安を抱えています。しかも、「分散登校」「学習保障の問題」「夏休みの取り扱い」等々、今までに経験したことのないことが次から次へと通知されていきます。

もう一度、保護者（児童生徒）の立場に戻り、何をこそ、どんな内容でそしてどんな方法で説明することが必要なのか、学校全体で確かめ合ってほしいと思います。

「わからないことへの不安」、学校の再開後も続きます。是非、誠意と愛情をもって精一杯対応していただくことを期待しています。そして、「学校に任せておけば大丈夫！」「この先生なら信頼してついて行けばいい！」、そんな思いをもってもらえるように頑張りたいと思います。

豊かな発想力と柔軟な対応力のある校長会

土岐市小・中学校校長会 会長 本多 直也

1 はじめに

毎年聞こえる、「4月の桜とともに希望のある一年の始まり」という響きが本当にあたたかく、元気のでるフレーズだったと改めて感じています。そんな中ですが、私たちは児童生徒と出会い、これまで以上に活気ある教室や運動場にする方法を考え、具体化することには変わりありません。そして、これから始まる授業について、小学校では改訂学習指導要領の実施にともない新しい教科書での教材研究を進めたり、中学校ではこの一年の移行期間を次にどうつなげるのか指導計画を見直したり、感染予防対策と並行して進めなくてはならない課題も多々あります。

2 発想のチェンジ

今回の臨時休業の措置は学校だけでなく、家庭、地域等様々なところで大きな影響を及ぼしています。しかし、こと学校の業務に目を向けると、マイナス要素ばかりではなく、これから学校で勤務する者へのヒントを与えてくれるとも受け止められます。企業ではテレワークが勤務の形態の一つになっているように、これまで、当たり前のように行ってきたことを見直すチャンスであります。すでに、PTA 総会の紙面決議や年度当初の顔合わせの会議の中止、研修会にいたっても資料配布による校内での代替え等今までなかった発想で様々な事業が進んでいます。

今の学校は「前年踏襲あと微調整」で進むことが多いです。このことは決して悪いことではなく、繰り返す中で、より意味のある、内容の充実した活動が展開できるようになります。また、計画や準備にかかる時間も少なくて済みます。しかし、今回私たちに求められているのは、過去の実績を信頼しつつも、歴史上まれにみる事態にどう対応するのか、また、新しい発想でこれからの学校を

どう進めていくのかを考え実行することではないでしょうか。「先入観は罪、固定観念は悪」という言葉がありますが、まさに今日の状況への教えだと思います。

3 土岐市校長会の方針

土岐市校長会では本年度の運営テーマを上記のようにし、土岐市の小・中学校の教職員と力を合わせて、令和の時代にふさわしい学校を創造し、この難局を乗り切る強い決意をしました。そのために、次の三つの大きな柱をもって、信念のある活動計画にしています。

①学校のリーダーとして意識を高めあう組織的な活動

- ・三部会による研修、小・中部会による具体的な取組の検討

②教育委員会をはじめとする関係機関との連携

- ・強固な連携ができる場の設定、協議

③児童生徒が将来を生き抜く力を育てる教育活動や職場環境の展開

- ・プログラミング教育、コミュニティスクール等への取組とスピード感ある働き方改革

4 最後に —オール土岐市—

これまでにない状況でスタートした令和2年度ですが、自然界をみれば、桜の花はきれいに咲き、そして山々は緑色になり始めています。1年後も、この光景に変わりはありません。私たちは、今ある状況を冷静にみて、最善の方策を考え実行することが、第2次土岐市教育基本振興計画にある「未来社会を切り拓いていく資質・能力を育成する」ことにつながると考えます。そのベースとなる教職員の皆さんにはそれぞれの立場で力を発揮いただき、土岐市の子どもたちが笑顔での学校生活を送れることを願っています。

浅野教室をどう使っていただくか

—よりよく適応できる通所生を目指して—

土岐市教育相談適応指導教室 室長 齋木 孝 明

復帰を果たした中3生

昨年度末、浅野教室を利用していた中学生が高等学校へ巣立っていきました。

浅野教室の使い方はいろいろでした。

生活のリズムを整える意味で、曜日を決めて通所をしたり、通所をする中で思うところがあって学校へ再び戻れたりもしました。また、あるときは、無理せず来られる時だけ通所した時期もありました。

振り返れば、一つできたらすぐ次のステップへと駆け足で上位の目標を目指すのではなく、着実に息長く自分のペースで歩めていました。

その結果、高等学校への進学を果たすことができ、本当によかったと思います。

いずれも、学校が本人とつながり続け、また浅野教室ともつながり続けることができたのがよかったのだと思っています。

浅野の使い方が肝

浅野教室では、その子に応じた浅野の使い方を、通所に至る初期段階に、保護者・本人・学校・浅野教室で共有します。通所期間中も懇談を適宜行い、成長を見守っていきます。無理せずその子の育ちに沿いながら、よい変化を見逃さずに喜び合い、かかわっていきます。上述した中3生も、このようにかかわることができたことがよかったのかもしれない。

令和2年度がスタートしました。

もし、児童生徒が学校への行きづらさを強く感じるようになり、学校が他機関との連携を考えねばならない状況になったときに、浅野教室がその候補にならないかご検討をいただくとありがたいです。

さて、浅野教室では、上述の適応指導や教育相談の他に、次のような取組もしています。是非ご活用ください。

カウンセリング

(1) 個別カウンセリング

校区ごとに配置されているスクールカウ

ンセラー（SC）さんが、予約が詰まっていて希望したようにカウンセリングが受けられない、あるいは緊急性がある場合は、浅野教室にもカウンセラー（AC）がいます。是非ご活用ください。その際は、各学校の浅野教室窓口の先生を通して、管理職の先生にご相談の上、事前に一報をお願いします。

毎週木曜日（第3木曜の午後を除く）
10時～15時

(2) グループカウンセリング

毎月第3木曜日の午後には、お子さんの不登校で悩んでみえる保護者の方々を対象に、グループカウンセリングを行っています。同じ悩みをもつ親さんどうしでお子さんの様子を交流し合い、お互いのかかわり方から学び合ったり共有したりする中で、悩みを低減したり乗り越えていったりするきっかけをつくっていただければという願いからです。行き詰まった時やグループカウンセリングの出口では、ACが助け舟を出してくれます。「他の親さんはどうやってわが子の不登校に対応してみえるのか。」という思いを抱いてみえる保護者さんや、「この保護者さんは同じような悩みがおありの方と交流されると道が拓けそう。」と先生方が思われたら、ぜひ浅野へお問い合わせを。

今年度も、浅野教室をどうぞよろしく願います。



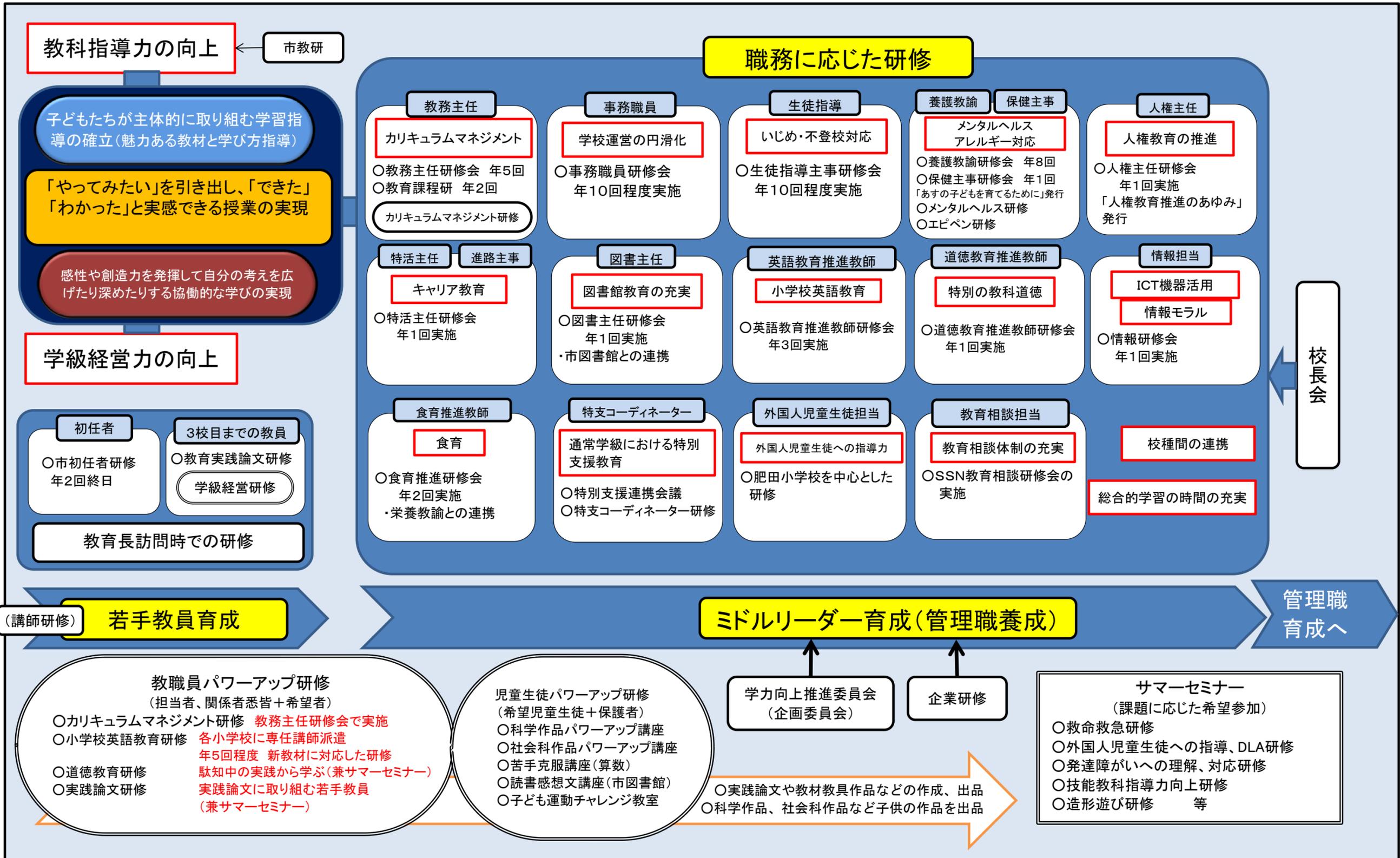
主に教育研究所が行う
土岐市教員研修の全体構想

基本方針

教職員としての魅力や実践的指導力を高める
研修の充実

研修の重点

- ① ミドルリーダーの育成を図る研修の充実
- ② 経験・職務に応じた研修の充実
- ③ 今日の課題に対応する研修の充実



「何か、もやもやする。」

駄知小学校 校長 小木曾 寛美

昨年の運動会のことです。運動会は競技と応援、共に赤団のW優勝に終わりました。閉会式後、児童席で赤団、白団、それぞれで応援団を中心に解団式が行われました。勝利に喜ぶ赤団、涙をこらえながら、団の仲間に感謝をする白団。両団とも応援団中心に締めくくりに「ゴーゴーゴー」を歌ったのですが、先に歌い終えた赤団が負けた白団を静かに見つめる姿がありました。

その後の片付けが終わりかけた時、ちょうど近くにいた赤の応援団のある児童に「優勝おめでとう。」と声をかけました。いつもの元気な彼なら満面の笑みで「やったあ」と返してくると思ったのですが、意外にも「うん」といいつつ「何かもやもやする」と言ったのです。

競技・応援と完全勝利だったのに、負けて悔しくて泣いている白団を見て、喜びを全開できな

ったあたりの表現だっただろうと思うのです。敗者の気持ちに思いを寄せ、うれしいけれど、自分はこの場でどう振る舞ったらいいか、ちょっと困っているようにも見えました。

これこそが「豊かな経験」なのだろうと思いました。本や教師の話ではなく、実際に体験することでしか学べないことで、これを積み重ねることで子ども達は成長するのだなあと改めて思います。

学校で子ども達といると、こうした瞬間に立ち会えることがあります。これこそが教師をさせてもらっている醍醐味であり、その感動をくれる子ども達に感謝しながら、毎日、過ごしていきたいと思っています。一日も早く、コロナウィルスが終息し、学校に子ども達の声が戻ることを願うばかりです。

掲 示 板

本年度もよろしく申し上げます

【教育研究所】〈前列左より〉

主 任 加藤 望
所 長 三宅 裕一（教育次長）
指導主事 西尾 新
〈後列左より〉
指導主事 保母 征之（教育総務課管理主事）
嘱託指導主事 安藤 篤
事務職員 伊藤 のり子



【ALT】

〈左より〉
マデリン
アルマン
ウイリアム
スワン
ローガン
マッカーシー



【浅野教室】

〈左より〉
室長 齋木 孝明
相談員 加藤 千穂

